

生活のなか

小田たつえ

他愛のない話

「小田さんの作品見せてよ」

閑散とした駅前のパブで言われた言葉である。同級生がそこに勤めており、酔いと人のいないことをいいことに小一時間黙弁っていた。チェイサーをいれつつとはいえ、ウイスキーロック四杯をそんな短時間に入れては笑い上戸になり、機嫌も自ずと良い。その子とは同窓会で会って以降、一度か二度連絡をよこしていた。買い物に付き合っただけと呼ばれ、別の同級生も合流して大所帯で回ったのともう懐かしかった。

私が文芸サークルに入っているのがやっぱり珍しいと思っただけだった。この話をすれば、大半は同じ反応をする。

「え、じゃあ小説書いてんの？」

まあ多少は。書くの遅いけど。

「ジャンルは？」

ジャンル、っていう訳じゃないけど、文体は決めてる。

「文豪やん」

そこまで書けないわ。

「今までどれぐらい書いたの？」

二十弱かな。

「まあまああの数じゃん。それじゃあ」

というところで、冒頭の言葉につながるのである。ふとしたところで見せる機会に恵まれる。書き手としてはありがたい話である。加えて言うと、感想を後で送ると言って半年以上が経つがまだ文面は届いていない。

この時差し出したものしかり、作品を書く上で人物たちがしようもない話をするのが好きである。しようもない話とは言いが、ここから生み出されるものごとがあるというのも事実である。読み手を得る機会なり、執筆や活動のきっかけなり、逆に停止を生み出すそれなりである。無駄が生み出すものはやはり計り知れない。

無駄ともいえるものが生み出した傑作がある。映画ではあるが、『パルプ・フィクション』である。映画は四つのショートストーリーからなる。強盗で生計を立てるカップル。ある組織の安い殺し屋二人。同じ組織のボスの嫁。場末のボクサー。四つはたまに絡みあうのだが、結局は時系列も濃密なつながりもあるわけじゃない。強い全体のまとまりがない。だが、単体では活きない。不思議な全体の雰囲気があり、おのずと一本の作品をつくる。要素を積み上げればヤクとか八百長とかの汚さが作品に光る。身分も中途半端で人間臭すぎる人物しか出てこない。人もシーンも清潔さなぞどこ吹く風である。オリジナルディズのパズルがシーンを掻き立てる。

この映画に対して、いちばん巧いと思う評価があった。「映画のジャンクフード」、このひとことである。主軸なんてない。部分でちぎればまあそれなりの旨味がある。だがまとまるとカオスにまみれた、だがもつと美味いと感じられる食い物になる。無駄をここまで極めると、高級レストランの肩身狭い中で食するものに引けを取らないところまで来る。

お酒もたばこも無駄と言えればそれまでである。人間の生み出した無駄は、すなわち文化となる。書きものも結局は妄想の産物である。ノンフィクション作品も、何処かの世界を切り出しただけで、そこに直接かわかることは無いに等しいにもかかわらず、知ろうとする意味

生活には無駄な行為とも考えて差し支えないと感ずる。にもかかわらず、無駄を愛することをやめようとはしない。これがむしろ人間的なのである。文化を愛し守ることが、人間であることの一つの条件になるのである。

赤蜻蛉

季節が合わないという文句垂れが出てきそうではある。が、私にはこの童謡は季節を感じるものというよりも長年の謎であった。

私の実家の周りに来てもらえたとわかるのだが、夕方不定期にどこから聞こえてくるのである。ある日はほんの小さな、音階一つがかるうじてわかる程度。別の日にはどの部分が流れているのかまではつきりわかるくらい。聴いていると短いものを延々と流しているらしい。ノイズの入ったメガホンから出ているようで、音階がかなり高めになっている。

少し調べてみると、和歌山でゴミ収集車から流れる音楽となつていているらしい。だが地域が違い過ぎる。私の住むところにはなんら心当たりが出てこなかった。ある日、思い切つて散歩がてら鳴つてる方に向かってみた。

段々と音が近づいていく。その先にいたのはものすごい遅さではしる白い軽トラだった。車体に何か文言があるわけじゃないけれど、荷台には雑多にものが積まれていた。

要するに廃品回収車だった。それも許可とかを得ていない「流し」の車だった流し、とはいいが言い方が合っているのかわからない。子供心に残っていた夕方に映える赤蜻蛉の正体が、白い業者であったのである。調べると、はじめて「赤とんぼ」の歌詞を知った。

夕焼、小焼の、あかとんぼ、負はれて見たのは、いつの日か。

山の畑の、桑の実を、小籠に、つんだは、まぼろしか。

十五で、姐やは嫁にゆき、お里の、たよりも、たえはてた。

夕やけ、小やけの、赤とんぼ。とまつてゐるよ、竿の先。

(同志社女子大学ホームページより)

かの山田耕筰が作曲を担い、いまや童謡の代表格となつてゐるわけだが、意外にも歌詞が大人びてゐる。桑の実取りや「姐や」の姿を思い出し、郷愁に浸るといふのはなかなか子供には似合わない気がする。「姐や」が嫁に行つたのはいいが、便りが絶えたというのもなんとも薄暗い。しかしそんな若干の暗さは、かえつて夕さりの得も言われぬ色合いや感覚になじむのかもしれない。

よくよく考えてみると、廃品を出すこと自体がものへの郷愁を生み出すことになつてゐるのではないかと感じる。たとえば、掃除で廃品が出たとき。捨てるには昔の使つていた頃を思い出して勿体ない気がする。そこに「赤とんぼ」が流れる車がさつそうと現れる。郷愁に郷愁を重ねた主婦か誰かが車を引き留める。「これを預かつてください」とでも言つて、若干の手数料を払う。

こうして白の軽トラが荷を増やして去つていく。捨てるという若干エゴをもつた行為ではなく、業者を介して預かつてもらうことで郷愁をもちつつも、置き場所や顛末にさいなまれることなく解決する。こういう業者の流す音楽として、案外悪くない気もしてくるのである。

拒絶(歌詞私記)

——火ぶたが落ちるのを待ち続けた

——あんまり長く待ち続けたもんで

——サイレンが聞こえやしなかった

——いろんなところに行つたけど

——時が来るのはわかつてたんだ

——お前がやられちまうのを

——だからそんなお前の語り部になるのさ

「よこせよ、ほしいんだ、ほらこっちに！」

金網越しに物珍し気な眼がこつちを向いてる。神様はあ

いつにラップを渡した、それも俺とおんなじやつを。音

色が突き刺さる。あいつが悶え苦しむ。

「傀儡に命なし」

愛なんてなかったんだ、ただ嫌悪がそこに在る

おまえは知の泉じゃなく無知の闇から見てたのさ

真実が殺されるのを願つて

どん底じゃ無駄も命も変わらない

今が流れゆくのを願うだけ

生命の美に気づかぬように

その死を迎えるまで

あの部屋のマジックミラーがお前を好んで食らう

壁の盗聴器はお前の言葉を裏付ける

消すんだ

——いややめる

消すんだ！

眠り(同)

あなたの笑顔が見える

永遠の眠りのそこに

いつしかきみが消えていく

私の心をわかつているのに

涙を背にきみが行く

ああ遠くへと遠くへと

聖者、胸に汝を抱かんとすれば

跪け、愚者となる可からず

瞳を閉じよ

さだめは打ち切られん

水面へと足掻けども

あゝ遠くへと遠くへと

《おわりに》

もう最近長いものが書けなくなつてきました。アイデアは出ます。でもそれが頭の中で続かず、四散するんですよね。提出期限に余裕があるとかそういうのではなく、想像力がなくなつてきたのでしょうか。私も潮時かもしれません。あと一年でなんとか長編に良い終わりを告げ、私はその先に創作を見出すことが出来るのでしょうか。ネガティブな締めくくりとなつてしまいましたことをお詫びします。ですが私は正直に申し上げねばならないと思つた次第です。それでは。

二〇二二年二月十一日